知りたい！治療の最前線 ◇25

脳卒中の外科

富山大附属病院の包括的脳卒中センターの概要と血管内治療について紹介するシリーズも最終回になりました。今回取り上げるのは脳卒中を治すための外科治療です。

動脈瘤の破裂予防

頸部にクリップ

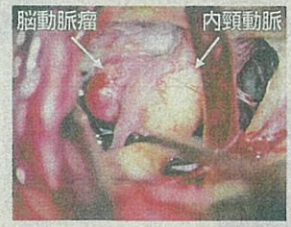
黒田 敏
富山大附属病院
包括的脳卒中センター長

当院は脳卒中の外科の治療施設として国内トップレベルの実績を誇り、県内はもとより北陸、東海、新潟、関東、そして海外からも患者さんが紹介されています。また国内外から多くの脳神経外科医が手術の見学に訪れています。

脳卒中の外科治療では、手術顕微鏡が抜群の力を発揮してくれます。私自身、若い頃は顕微鏡手術のエキスパートになりたくて、毎日必死に練習しました。

脳卒中は、脳の中で出血して脳を破壊してしまう病気です。高血圧が主な原因で、出血が小さければ内科治療で十分ですが、出血が大きい場合、緊急で開頭し、脳の中の血腫を摘出して救命しなければなりません。当院では年間10～15件の手術を実施しています。

脳動脈瘤は、脳の動脈に発生する病気で、動脈壁が徐々に薄くなって破裂すると、くも膜下出血を来します。日本人の約5％が脳動脈瘤を持っています。最近はMRI検査などによって破裂する前に発見されることも多いのが特徴です。開頭して脳の深部に分け入り、脳動脈瘤の頸部にクリップをかけるクリッピング手術で破裂を予防します。2018年、当院では36件のクリッピング手術を行いました。この他にカテーテルを通してコイルで脳動脈瘤を閉塞させるコイル塞栓術も実施しています。



㊤脳動脈瘤の顕微鏡手術
㊦脳動脈瘤の壁が薄くなって内部の血が透けて真っ赤に見える

高血圧など原因

一過性脳虚血発作と脳梗塞は、主に動脈硬化が原因で脳の動脈が細くなったり閉塞すると発症します。高血圧のほか、高コレステロール血症や糖尿病も原因になると考えられています。多くは内科治療により予防しますが、脳の太い動脈に病気がある場合は、外科治療が必要になることがあります。首の頸動脈が細くなっている場合は、頸動脈を切開して動脈硬化の病変を摘出します。カテーテルを通して金属のステントを入れることで頸動脈を広げる治療もあります。

もやもや病

また、脳の動脈が閉塞しているために脳の血流が悪くなっている場合は、頭皮の動脈を脳の動脈につないで脳の血流を改善させるバイパス手術を行います。昨年は32件実施しました。動脈硬化のほか、子供にも大人にも発生する「もやもや病」などが対象になります。脳動脈の直径は0・5～1㎜なので、手術では非常に繊細な手技が要求されます。

脳卒中はいつ発生するか分からない病気です。患者さんにいつでも最良の治療を提供できるよう、われわれには強靭なメンタリティーと心身の健康を保ちつつ、常に鍛錬を怠らず、診療と研究にまい進する使命があります。同時に、次世代の担い手を育てるための教育にも力を入れています。

◇

次回は来年1月14日に掲載します。

一口メモ

もやもや病は、血管が細くなって脳内に血液が行き渡らなくなり、片まひや意識障害、脳内出血などを引き起こす病気。日本で発見され、血管が「もやもや」とたばこの煙のように見えることから1969年に命名された。厚生労働省の難病に指定されている。